

＜社会化＞とは、人や他の動物、さまざまなものや環境に慣らしていくことをいいます。よく社会化された子犬は、些細なことに動じない、落ち着いた、飼いやすい犬に成長し、人間社会に適応しやすくなります。一般に犬は、生後3週から16週までが「社会化期」と呼ばれ、さまざまなことを受け入れやすい時期とされています。収容され飼養期間中の子犬はほとんどがこの期間に当たりますので、飼いやすく譲渡されやすい子犬になるように、適切な社会化を行ってください。

なお、社会化期を過ぎても、ゆっくりと時間をかければさまざまなことに慣らすことは可能です。

人に慣らす

いろいろな人に慣れさせましょう

男性、女性、作業着や白衣の人など、さまざまな人からフードを与えるようにしましょう。人に対して良い印象を持たせ、人好きな子犬に育てるためにとっても大事なことです。事務方の職員やボランティアに協力してもらうのもいいでしょう。



子犬の集団心理を利用しましょう

人に対してシャイな子犬は、友好的な子犬のグループと一緒にしておくことで、良い影響を受け、徐々に人に対して近づいてくるようになることがあります。逆に、興奮レベルが高く、遊びがしつこいグループにシャイな子犬を入れると余計萎縮してしまうこともありますので、子犬たちの様子をよく観察し、良い影響を与えあう組み合わせを考えましょう。



スキンシップの時間を作りましょう

できるだけ多く、子犬と触れ合う時間を作ってください。優しく声をかけたり、触ったり抱き上げたりすることで、子犬は人に慣れ譲渡されやすくなります。



人の手からフードを与えましょう

余裕があれば、食器からフードをすくって人の手から子犬に食べさせましょう。人の手に対して良い印象を与え、早く人に慣れます。また、将来的に、食べ物を守るための攻撃性が出にくくなるという効果もあります。



ステンレスケージにいる子犬にも、人の手からフードを与えましょう

人が近づいてくるといいことが起きるのだということを、強く子犬に印象付けます。作業中や通りすがりに2～3粒与えるだけでも効果がありますので、ぜひ行ってください。



犬に慣らす



社会化期の子犬は、他の犬たちとの遊びの中から犬同士の挨拶のしかたや噛みつき抑制（どの程度の強さで噛むと相手の犬に拒否されるか）など、犬として生きていく上で必要なことを学んでいきます。また、複数でいることで精神的にも安定し、遊びでエネルギーを発散させることができます。

さまざまな刺激に慣らす

譲渡後の家庭や、人間社会で子犬が出会うであろう刺激に、収容期間中から慣らしておくのもいいでしょう。ここに挙げている例を参考に、それぞれの施設で工夫してみてください。

見慣れないものに慣らしましょう

見慣れないものや人が子犬に近づいたときに子犬が落ち着いていたらフードをあたえます。子犬にとって新しい刺激と、良いこと（ここではフード）を結びつけて、刺激に対して過度に反応しない、情緒の安定した子犬に育てましょう。



生活音を聞かせましょう

CDやラジオを使って、譲渡後の家庭にありそうな生活音（インターフォン、サイレン、子供の声、などの効果音）を、飼育スペースに流しておくことで、音に対する社会化ができます。音を怖がる子犬の場合は、小さな音量から始めてください。



外の刺激に慣らしましょう

時間があれば、子犬を抱いて外に出しましょう。施設の敷地内で十分です。外の環境を体験させ、落ちついているようならフードをあたえ、外の刺激と良いことを結びつけてやりましょう。



① 注意

社会化のポイントは、「慣らす」ことであり、「強いる」ことではありません。【小さな刺激から徐々に慣らす】【新しい刺激と良いこと（フードなど）を結びつける】【怖がることは無理にしない】といった点に注意しましょう。

神戸市動物管理センターでは、「セクター譲渡事業支援ボランティアグループ（社）日本動物福祉協会CCクロ」と協定を結び、子犬の社会化やケア、譲渡者の選定やアフターフォローなどを協働で行っています。特に子犬の社会化を促進するため、子犬のホームステイをボランティアに依頼することもあります。受け入れるボランティア側の環境により、1〜数頭を自宅に連れて帰り、飼育管理をしてもらうことで、特に手間のかかる子犬や、性的に細やかな社会化が必要な子犬に、非常に良い影響が見られます。ホームステイ先に明確な基準はありませんが、責任を持って犬を管理できるとCCクロが判断したボランティアに限っています。なお、犬をセンター外に出す場合は、予め市に文書で申請し、許可を得てから行っています。



神戸市 子犬のホームステイ

事例④